

早歌の〈正本〉について

—新出の坂阿署名本『宴曲集』巻第四を中心に—

外村南都子

鎌倉時代の後半に成立した早歌の写本は、詳細な朱墨譜付きの譜本の形で伝わるが、その伝え方には、独特の工夫が見られる。奥書にも〈正本〉という表現が使われていて、後の浄瑠璃などの先駆をなすのではないかと思われる。早歌の譜本は十六帖の撰集と外物一帖、一七三曲、異説・兩曲各四八を集めた二帖、計十九帖すべてについて、実際に歌われていた時期、室町時代の譜本（以下歌い本とする）とその江戸時代の厳密な写本が伝存する。早歌の譜本は「早歌の手書き」と呼ばれる書の専門家が歌詞を書き、早歌の宗家的名手（早歌の好士、早歌うたひ）が朱墨譜を施して署名する。詳細な朱墨譜は右傍に、左傍に片仮名の振り仮名が付されている。全部ではないが、濁点（まれに清点も）が付されているものもある。名手の署名はすべてについて保証するものと思われる。それで、伝存する早歌の詞章は、表記はさまざまであるが、音訓どちらの読みになるかというところまで、ゆれが見られないという、歌謡としては珍しい在り方を見せている。このことについては、「早歌の研

究」（外村久江、至文堂 昭40）に詳しい。そのような特色に基づき、「早歌全詞集」（外村久江と共著、三弥井書店 平5）において、それまでに知られていた歌い本・伝写本^{注1}を校合し、早歌の歌詞をまとめて発表した。その時点では、坂阿署名本は「宴曲抄」上と「真曲抄」の二本のみであり、他に、実阿署名の「外物」・「撰要兩曲卷」、口阿署名の抜粹本、無署名の歌い本、そうして江戸期の伝写本であった。「宴曲集」巻第四については、尊経閣文庫本・東大史料編纂所本の無署名歌い本と江戸期の伝写本のみであった。

その後、冷泉家時雨亭文庫に坂阿署名本（「宴曲集」三・「宴曲抄」上・同中・同下・「真曲抄」〈署名欠〉・「究百集」・「拾菓集」上・「玉林苑」下の八帖、「玉林苑」下には十六帖揃いの〈正本〉とする署名がある〈後掲〉）と無署名の歌い本の譜本が多数伝存することがわかり、影印本の形で発表された。また、専修大学図書館蔵菊亭文庫本「究百集」の無署名歌い本も翻刻紹介された。これらの写本によって、早歌の詞章は、さらに保証されることになったわけである。

ところが、さらに、坂阿署名の「宴曲集」巻第四が出現した

のである。後述するように、時雨亭文庫の本とは違うシリーズの一本かと思られるものである。

そこで、今回、早歌のこれまで知られていなかった重要な譜本が出現した機会に、この新出の坂阿署名本の紹介をしながら、早歌における「正本」の在り方について、考察してみたいと思う。

二

まず、坂阿署名本「宴曲集」巻第四（架蔵）の紹介から始める。この本は末尾に、

為塩治廣田金吾差博士畢

応永二年十二月五日 沙弥坂（花押）

という坂阿の花押つきの署名のある朱墨譜完備の本である。冷泉家時雨亭文庫の坂阿署名本は、明徳二年（一三九一）七月廿五日から応永元年（一三九四）八月廿二日に至る揃い本で、「為塩治廣田金吾差博士畢」の文はなく、最後の「玉林苑」下のところだけに「為■■■■差博士」於門弟可為正本者也」とあるが、宛名のところは消されている。別のシリーズであることが知られる。これまで知られていた譜本で「塩治廣田金吾」あての前文を有する坂阿署名本は、京都府立総合資料館本の「宴曲抄」上である。この本の年次は応永二年十二月十三日、今度出現した「宴曲集」巻第四の八日後である。歌詞の書き手の手跡も似ており、全曲に朱一点の濁点が右傍（京都本は最後の「十六」の途中から左傍）に付されていることなどを考え合わせると、京都本と揃い本であったとみられる。この三年

前から始められた冷泉家時雨亭文庫の坂阿署名本には濁点がない。「宴曲抄」上は両方が伝存するわけである。後のものに濁点がつけられているのは、要望に依えて新たに別の揃い本を作ったものではないかと思われる。

ほかに、手跡が似ていて坂阿の署名（応永三年卯月五）のある本としては、岐阜円徳寺本「真曲抄」がある。「真曲抄」は秘曲集として、扱いが他の撰集とは違うようで、坂阿の署名の前の「塩治廣田金吾」あての前文はなく、振り仮名も少く、朱濁点もない。冷泉家時雨亭文庫の揃い本も「真曲抄」だけは署名のところが変わっているが、これも伝授の在り方と関係があるかもしれない。なお、歌い本ではないが、統群書類従本「別紙追加曲」の

為塩治廣田金吾差博士畢

応永二年六月一日 沙弥坂判

という奥書と、これも歌い本ではないが、三手文庫本「究百集」の

為塩治廣田金吾差博士畢

于時応永第二曆応鐘下九日 沙弥坂花押

の奥書は、同じ応永二年六月と十月であり、気になる存在である。伊藤正義氏はこの二つの奥書について、巻序を追った年記でないこと、他本からの奥書転写の例が少くないことなどにより、やや疑いを存すとされている。確かに、順不同であるが、早歌の「正本」のその後の扱い、五行書きや朱墨譜・振り仮名に至るまで写していることを考えると、奥書転写の可能性は少ないのではないかと思われる。円徳寺本とともに、もとは十六帖

の揃い本であった痕跡を示すものではなからうか。

書誌などの詳細は「翻刻」応永二年坂阿署名本「宴曲集」巻第四（白百合女子大学言語・文学研究論集（言語・文学研究センター）5 平17・3）に述べたので、参照されたい。

本文検討の結果、「早歌全詞集」の本文を訂正すべき点があった。それは、「羈旅」の初めの部分の「宿を^ト」は「宿せしめ」とすべきであるということである。早歌の歌詞は前述のように、音としては原則的にくいちがいがないといつてよいが、極めて例外的に音として二通りになっているところがある。こゝもそうであるが、歌われていた当時の譜本である坂阿署名本・冷泉家時雨亭文庫無署名歌い本の二本が「宿せしめ」で一一致しているの、これがもとの形とすべきである。東大史料編纂所無署名本・尊経閣文庫無署名本の「早歌全詞集」の段階で知られていた二本には振り仮名がなく、松平文庫（甲）本に「宿をしめ」と、振り仮名・濁点が付されているためにこちらによつたものである。たまたま草仮名の「を（遠）」と「せ（世）」の字体が極めて似ていることと「宿」に振り仮名のない本が介在したために生じた誤りとみられる。また、早歌では他に野宿を歌つた所がある（海道上など）ことも、原因の一つかと思われる。なお、「羈旅」のこの部分は、前に「露駅にくらをときては 野村の草むらに宿せしめ」と続くので、「宿せしめ」るのは乗ってきた馬ということになる。

ところで、清濁に関しては、今度調査してみても、「早歌全詞集」と坂阿署名本でくいちがうところがあることがわかつた。問題の箇所だけに振り仮名を付して示すと次のようである。

○濁点の異同

曲名	早歌全詞集（頁一行）	坂阿本
楽府	70—10	童男
伊勢物語	72—3	河原
	72—4	夷心
	72—5	ひたぶるに
海辺	74—2	*ひたぶるに
	75—1	*いづて舟
海路	75—4	*深楼
	75—9	*深楼
	75—9	玉
	75—9	玉
	75—9	盤
	75—9	跳り
	75—11	*干瀉
	75—12	しまつ鳥
	75—15	急
	75—15	綱手縄
	76—2	森戸
海道上	77—2	*綱手縄
	77—2	森ど
	77—4	*旅衣
	77—8	藤川
	77—11	いふき山
海道中	78—7	新今橋
	79—8	のらざば
海道下	80—3	*のらざば
		船木*

81—5 花摺衣 花ずり衣
 81—7 蘇武 *蘇武
 81—7 馬上 *馬上

無常 84—7 結べば 結べば
 81—8 かからずば *かゝらずは

右の表のうち、*印をつけた一三箇所は「早歌全詞集」の段階で濁点のつけられている唯一の本であった松平(甲)本と坂阿本と清濁が一致するものである。濁点のついた歌い本がなく、その忠実な写本である松平文庫(甲)本(全曲に濁点がある)が後世の写しということで、他を考え合わせて本文を決めた。しかし、二本が一致するということは、これに従うべきか。

他の一四箇所は、松平(甲)本と坂阿署名本とでくいちがつている場合である。これらについては、歌い本の原本で署名もある坂阿署名本のほうによるのが妥当ではないかと思うが、問題は、坂阿本に濁点のある六箇所はこれによるべきかと思うが、ない八箇所は坂阿本で濁点が抜けた可能性があるからである。「ほどはしり」は濁点の位置がずれている例だが、この形もあつたので、これは坂阿本によるべきかと思う。

坂阿署名本も松平(甲)本もすべての曲に濁点があるので、もちろん「仙人」「尋陽」「昇遷橋」「垂迹」「枯葉」など、後世とは違う濁点で一致するものも多いのであるが、やはり清濁については、くいちがいが生じやすいようである。

濁点のついているものは、はつきりするが、ついていない場合、付け落としの可能性もある。「干瀉」などは二箇所とも両本に濁点がないので、明らかに澄んで発音していたものと思わ

れる。坂阿本にも付け落とししかという箇所があるので、なお、検討を要する。

それから、稀であるが、坂阿署名本だけの誤りとみられる箇所もある。

○独自の誤り

曲名 早歌全詞集(頁1行) 坂阿本

源氏 73—12 いかか
 伊勢物語 72—3 渡守に 渡守も

海辺 72—7 隔とや 隔とや
 74—12 求るに 求に

海道中 78—11 水鳥 水鳥
 81—2 耳 耳

無常 85—1 萌せり 萌せり
 85—2 漸 漸

一例だけが本文の誤写で、他の四例は振り仮名の足りないもの、残り二例は濁点の位置の誤りである。本文の右傍に片仮名で補った箇所もあるが、訂正もれである。

それから、坂阿署名本には折り目の所に濡れた跡、表二行目(裏四行目)の中央から少し下のあたりに虫損の跡とそれを補修した跡があり、一部消失したかとみられる部分がある。

○消失

伊勢物語 72—7 便かは 便口は

海道下 80—6 原 原

「海辺」のはじめの「棍」は濁点がついているが、ふりがなの「チ」が根跡を残すのみである。他に「海道上」に一箇所「海

道下」に二箇所もとあつた濁点が消え朱の痕跡がある所がある。

三

つぎに、早歌の〈正本〉がどのようなものであつたのか、奥書などにあらわれた用例によつて、少し探つてみたいと思う。もつとも早い例は、円徳寺本「真曲抄」にある明空の識語にある。(傍線筆者)

已上三首一説等各終仁郭云々

惣十首異説等校点畢 於末代可為正本云々

永仁四年二月三日

明空在判

このあとに、坂阿の応永三年四月の署名があつて、証明されているので、明空の原本ではないが、永仁四年(一二九六)の「真曲抄」成立時にすでに〈正本〉という語が使われていたと見てよいであらう。

つぎに冷泉家時雨亭文庫本「玉林苑」下の奥書に、

為■■■■差博士

於門弟可為正本者也

応永元年八月廿二日 沙弥坂(花押)

とあり、坂阿が十六帖の撰集に朱墨譜を施した本を正本としている。

坂阿の子口阿と同年代の実阿も、

於当流可為正本

沙弥実阿(花押)

応永二十年十二月十三日

と、外物の奥書に書いている。また、「撰要兩曲卷」(白田甚五

郎氏蔵本)にも、

於当流可為正本

沙弥実阿(花押)

応永二十年十二月十三日

と、全く同じ奥書を残している。撰集の十六帖一六一曲だけでなく、「外物」一二曲や替え歌の兩曲についても〈正本〉としているのである。

「撰要兩曲卷」と同じ顔ぶれに伝授された「異説秘抄口伝卷」は百曲以上習得者用の秘曲の集成であるが、その奥書にも次のような〈正本〉の例がある。

右異説秘抄惣而四十八首 所撰集如件。

文保三年三月上旬之比撰調之

桑門月江在判

此卷者千金莫伝書也。不究奥蹟之外者、輒不可免。(中略)

仍為末代、所定置如斯。月江重判

正中二年三月五日 被許奥書之

次相伝此卷 二宮小次郎源信貞在判

於当道為秘説。但坂口平三盛勝音曲五音達者極奥蹟上者、

此卷令相伝者也。于時延文第二曆無射下旬之比以正本書

写之

沙弥道阿在判

というものである。この後も次々と伝授されて行くのであるが、これは、晩年月江と改名後の明空から二宮信貞(道阿)、さらに坂口盛勝(坂阿)へと、次々に伝えられて行く過程で「以正本書写之」と道阿が記しているものである。〈正本〉が存在し、

それを写して相伝すること、異説についても〈正本〉が用いられていることがわかる。

撰集の十六帖については、冷泉家時雨亭文庫蔵坂阿署名本の最後の「玉林苑」下の前掲の奥書に続けて、

此早歌本一部十六帖坂阿博士正本也 殊坂阿自筆判形等分
明候也

山樞中入道
宗光(花押)

とある。明応六年(一四九七)は坂阿の奥書の約百年後である。

宗光は金山元実で、口阿と車の両輪のように言われた早歌の名手清阿(心敬「ひとり言」の弟子であると乾克己氏はされた。しかし、根拠の面賛を再検討したところ、清阿の弟子だったのは元実の父持実である。

また、同人は、

此一部十六冊政阿博士也 殊朱墨及五音等無比 尤可為当
道証本而已

文亀二年九月五日

沙弥宗光

という奥書も残している。伊藤正義氏は尊経閣文庫蔵「玉林苑」下によるとし、「この奥書は、伊達文庫、三手文庫、松平文庫その他の諸本(「玉林苑」下)にも写されている」とされているが、尊経閣文庫蔵「玉林苑」下は早く江戸時代に流出して、補写されたものであり、尊経閣文庫の揃いの歌い本にはこの奥書はない。(現在国文学研究資料館蔵)つまり、この奥書については、歌われていた当時の譜本がないわけで、それだけが「証本」としていることは、誤写の可能性が高いと思われる。「政阿」についても、伊藤氏が「明応六年奥書に照らして坂阿

を誤った可能性が高い」とされるのも、そうであるかもしれないと思う。もし、そうとすれば、文章が違い、署名の年月日が違うので、同じ人が、冷泉家本とは別の坂阿署名本の十六帖の〈正本〉について、五年後の文亀二年(一五〇二)に書いた痕跡を伝えるものではないかと思う。そうであれば、これも後世の写してはあるが、坂阿署名の十六帖の別本の存在を知らせる資料なのではなからうか。ただ、宗光の父が清阿の弟子であることや〈正本〉を記すのは坂阿に限るわけではないことを考え合わせると、乾克己氏の同音異字の誤写の可能性も全く否定できないようにも思われる。清阿については、中世の記録で「盛阿」とするものもある。いったいに昔の人は音のほうは敏感で字は無頓着の傾向があるようである。

以上のように、早歌の奥書などに出てくる〈正本〉の例は、この詞章で、この曲節で、この読みで、歌うのだという規範になるべき本という意味で用いられている。そうして、明空(後に月江)が定めた譜本があり、それを伝授するのが早歌のやり方であったことがわかる。

四

これまでは、〈正本〉の語を含む例だけ見てきたが、〈正本〉と書いていなくても、今問題にしている坂阿署名本のように、それに当る場合がある。つぎに、その辺について、もう少し考えてみたい。

「異説秘抄口伝巻」「撰要両曲巻」を坂阿から相伝している口阿(坂口盛幸)も、

永享八年卯月五日

坂口左京亮平盛幸

九十歳口阿(花押)

という奥書を「郢曲拔華」(龍門文庫本)に残している。この本は八曲を抜き出して朱墨譜を付けた口阿自筆の本で、九十のお祝いのものであつたらしい。この人は坂阿の弟子であるとともに、子でもあつたようで、たいそう長生きであり、心敬の「ひとり言」によると、このあと七、八年生きて、文安ころに亡くなつたらしい。この奥書の二年前の正月には八十八歳の弘阿弥(口阿とみられる)が室町殿の御会始に早歌を歌つたことが見える(満濟准后日記^{註10})。

この口阿をはじめ、異説・兩曲を相伝した人々、日記・記録の類に早歌の好士として名の見える人々はもちろんのこと、名は伝わらなくても早歌の相伝を受けた人々はみな「正本」にかかわつたものと思われる。多くの無署名譜本が伝存するが、五行書きの朱墨譜完備、振り仮名つき(中には濁点・清点も)という「正本」と奥書にあるものと全く同じ形式のものも多い。これから考えると、今取り上げている坂阿署名本のように、特定の人のために朱墨譜を施して与える場合には署名をするが、伝授を受ける側の本には署名がないということも想定できるのではなからうか。つまり、歌い本については、署名がなくても、「正本」と同じように考えてよいのではないかということである。さらに、江戸期になつてこれらの「正本」を字配りまでそっくりに写した本が多数伝存する。厳密さには本によって差があるが、例えば、今回比較した松平文庫(甲)本のように、濁

点まで完備している本については、かなり重んじてよいものと思われる。

五

以上、坂阿署名本「宴曲集」巻第四を紹介し、その本文を検討した。この本は早歌の譜本の中でも、「正本」中の「正本」といふべき由緒正しい本である。歌詞の筆致、曲節の付け方や濁点をすべてに付している点など、巻末の「塩冶廣田金吾」あての前文を持つ署名の一致から、京都府立総合資料館本「宴曲抄」上と揃いの本と認められる。また、後世の写しではあるが、「塩冶廣田金吾」あての前文をもつ坂阿の署名のある「究百集」と「別紙追加曲」の伝存、岐阜円徳寺蔵「真曲抄」という翌三年の坂阿署名本(歌詞同筆とみられる)の存在、宗光の時雨亭文庫本とは別文の十六帖の撰集を保証する奥書の写しの存在は、もと十六帖の「正本」であつたことをうかがわせるものである。年記は撰集順になつてはいないが、何らかの事情で順不同に作られたのではなからうか。

「宴曲集」巻第四の本文であるが、調査の結果、「羈旅」のはじめの「宿を卜」(「早歌全詞集」81頁4行目)は、「宿せしめ」と訂正すべきことが判明した。また、清濁については、二〇箇所ほど、訂正すべきものかと考える。しかし、清濁の問題はさらに検討すべき点もあり、今後の課題としたい。

早歌の「正本」は今度出てきた坂阿署名本のように、発音の清濁まで、すべてにつけるといふ徹底したものもある。それでも、写されて行く過程で、「宿せしめ」のような違いを生ずる

のであるから、人間とは過ちをする動物であるということを変更して痛感させられる。そうして、それでもあきらめずに工夫しようとするのも人間なのだと思う。

早歌の「正本」について、奥書の類にこの語を含む例を検討した結果、早歌の大半を作った撰者の明空（晩年は月江）の時代に「正本」として定め置くということがなされ、宗家的な名手の手によって、次々と受け伝えられていったこと、「正本」は十六帖の撰集、「外物」一帖、異説・兩曲の替え歌、すべてについて用いられていることがわかった。現在まで署名が残されている名手は限られているが、よほど多数手がけたために残ったもので、他の人の署名本もあつたはずである。また、奥書を許すということが特別な意味をもっていたことと関係があるかとも思われる。記録の類に名に見える早歌の好士たちも名の伝わらなかつた相伝者たちも、この「正本」の受け伝えにかかわり、さらに、歌われなくなつた江戸期にまで、厳密な写本の作成という形で、ゆれのない歌詞が伝えられたわけである。

今度、濁点の調査をしてみて、すべての語に濁点を付すという当時としては画期的とも思われるやり方に、どうしても伝えようという執念のようなものを感じた。後白河院は声わざとしての歌謡が伝えられないことを嘆いたが、それを何とか克服しようとしたのが、早歌の「正本」であり、詳細な朱墨譜の創造とともに、歌謡や語り物の世界に新しい時代を開いて行ったのである。

注1 蒲生美津子「早歌の音楽的研究」(三省堂 昭58)に

も歌い本が紹介された。

2 伊藤正義「宴曲 上」(冷泉家時雨亭叢書 朝日新聞社 平8) 同「宴曲 下」(同 平9)

3 姫野敦子「資料紹介」専修大学図書館蔵菊亭文庫本「究百集」(梁塵研究と資料21 平15)

4 この写本との出会いについては、神田裕子氏から情報をおいただいたことが大きかった。御礼申し上げる。

5 「宴曲 上」の解題(注2)

6 外村久江「早歌の研究」(至文堂 昭40)

7 乾克己「宴曲の伝流と武士—金山氏・四宮氏を中心として—」(國學院雑誌75—6 昭49・6 「中世歌謡の世界」近代文芸社 平4)

8 注5の書解題。

9 注7の論文。

10 注6の書。

補注

本編でとりあげた応永二年坂阿署名本「宴曲集」巻第四の写真は「早歌の心情と表現—中世を開拓する歌謡—」(三弥井書店 平17)の口絵写真に掲げた。

(本学教授)